豊明市大脇城遺跡の検討

- 桶狭間の戦いと梶川五左衛門屋敷 -

永井邦仁

豊明市に所在する大脇城遺跡は戦国時代の城館遺跡で、梶川五左衛門屋敷とも呼ばれている。当該遺跡は、発掘調査によって方形の主郭を区画する堀や井戸など多数の遺構が検出されている。その調査成果や地籍図との対照から掘立柱建物の分布や屋敷地群の想定を行い、その北縁を廻る薬研堀の溝が近世東海道に対する防御線であった可能性を指摘した。加えて正戸川に面する川湊の要素から知多半島への水上交通に通じていたと考えられる。城主とされる梶川五左衛門が水野家の家臣であることを踏まえると、桶狭間の戦い以降、知多半島に拡大した水野家勢力の最前線になったと評価される。

1．大脇城遺跡と梶川五左衛門屋敷

愛知県豊明市に所在する大脇城遺跡は、平成8～9、11年度（1996～1997、1999年度）に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った中世城館跡である。現在は国道23号および伊勢湾岸自動車道豊明インターチェンジの用地となっている。発掘調査では、多数の井戸や薬研堀・箱堀お含む溝が検出され、戦国時代から江戸時代後期（15世紀後葉～19世紀）までの土器・陶磁器類が出土している。（北村1999・池本2001）。遺跡は遺物の時期によって第Ⅰ期～第Ⅲ期の変遷があるとされ（北村1999）、第Ⅰ期が戦国時代の城館（15世紀後葉～16世紀後葉）、第Ⅱ期が江戸時代前期の集落（17世紀初頭～後葉）、第Ⅲ期が江戸時代中・後期の耕作地（18～19世紀）と評価されている。

ところで、中世城館跡の呼称である大脇城遺跡の「大脇城」は史料に存在しない。1670年代に編纂された尾張藩の地誌『寛文村々覚書』の「大脇村」の項には「先年梶川五左衛門居城之由、今ハ畑成」と記され、大脇区所蔵村絵図（江戸時代後期）には「狐薮 往古梶川五左衛門ト申人ノ屋敷跡ト申伝候」と注記がある。「梶川五左衛門屋敷」の呼称はここに由来する。

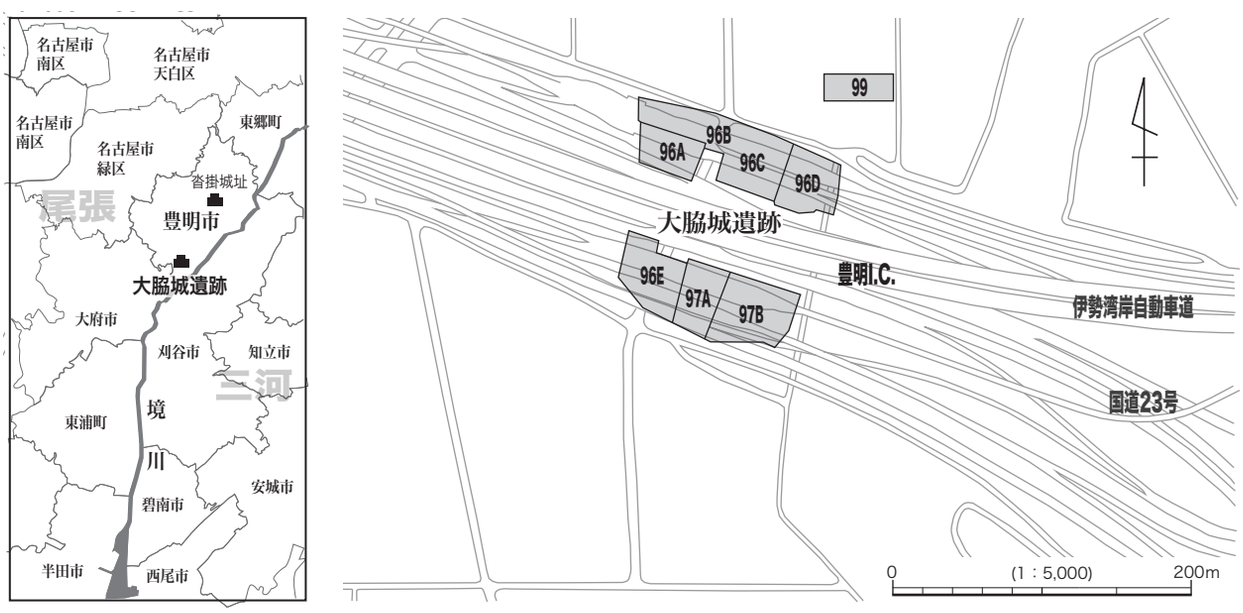

図1　遺跡の位置と調査区配置図

2．大脇城遺跡で発掘された堀と井戸

大脇城遺跡は境川流域の沖積低地に立地し、境川の支流である正戸川右岸に接している。遺跡主体部（97B 区）の地表面標高は約 3.5m で、そこから西方約 0.6km に南北に伸びる丘陵地があり江戸時代から続く大脇村（現在の大脇地区）や曹洞宗曹源寺が所在する。この曹源寺二世快翁龍喜和尚が、永禄 3（1560）年の桶狭間の戦いによる多数の戦死者を葬り塚としたのが戦人塚（国史跡、豊明市栄町）である。曹源寺の寺伝によれば承応 3（1654）年に火災で滅失した旧伽藍は字元屋敷にあり、これは大脇城遺跡南隣に位置する。また同じ頃、正戸川の氾濫が激しくなったために高台に移転したといい、このことから 17 世紀までは寺や集落が沖積低地に所在していたと考えられる。

江戸時代に集落などが移転した後の大脇城遺跡の地はさらに耕作が進んで、発掘調査時点から 40 年ほど前には「狐薮」と呼ばれる 4 坪ほどの草に覆われた「塚」が残るのみであったという（豊明町誌編集委員会 1959）。したがって土塁などの高まりを中心に削平がかなり進んでいたとみられ、発掘調査においても例えば主体部（97B 区）の区画内では井戸のような深く掘り込まれた遺構しか検出されていない。したがって、城館とその周辺の景観を復元するにあたって、堀や区画溝、井戸の分布を基礎にしてみていくことになる。

97B 区 SD01　97B 区の南・西縁に沿って検出された城館主郭をめぐる堀である。それぞれが方形区画の南・西堀に相当する。これらに区画される範囲は東西 37.4m 以上、南北 30.8m 以上で面積は約 1,152 ㎡以上となる。ただし先述の通りこの範囲内は削平が特に顕著で井戸以外の遺構はわずかしか検出されておらず、主郭の景観を想定するのは難しい。97B 区 SD01 の西堀相当部では上幅 3.7 ～ 5.0m、下幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.9 ～ 1.4m を測る。

堆積層は 1 ～ 4 層に大別される。比較的上層（1 ～ 3 層）における出土遺物の時期は古瀬戸後Ⅳ期～大窯第 3 段階、登窯第 1 ～ 5 小期である。このうち 1 層では登窯第 3 ～ 5 小期が最も多く主に 17 世紀後半に堆積したことになるが、2・3 層にも登窯期のものが含まれているので大半が 17 世紀代に堆積が進んだとみられる。これに対して最下層の 4 層では古瀬戸後Ⅳ期～大窯第 3 段階が大半であり、これが城館機能時の堆積と考えられる。

各層を通じた遺物相の特徴として、土師器の半球型内耳鍋が多い点と常滑窯産陶器が目立つ点が挙げられる。前者の内耳鍋は、羽釜（1105・1134）や釜（1106・1118）とともに尾張地域を中心に分布する型式で（鈴木 2017）、これに対して大脇城遺跡から東方の三河地域で分布する内湾型やくの字型口縁の内耳鍋がほとんどみられない点が注意される。後者の常滑産陶器は、戦国時代に大甕などの貯蔵具は列島各地に分布する一方、江戸時代になると火鉢など小型道具が近隣地域に分布するようになる。

そしてこの時期区分をもとに断面形状（図 3）をみると、4 層堆積後に溝の幅が区画内側方向へ極端に広がっていることから、一旦埋没の進んだ堀を再掘削して江戸時代集落の区画溝として再生したものとみてよいだろう。また元の堀は 4 層部分の側壁角度からすればより幅が狭かったとみることができる。なお SD01 の構築時期は、古瀬戸後Ⅳ期の陶器が出土する井戸 97B 区 SE08 を壊しているので大窯第 1 段階以降とされる。

96A・B・C 区 SD01　発掘調査の北部で長さ 176m 以上にわたって検出された断面が V 字形の溝である。溝の規模は 96B 区で上幅 2.4 ～ 3.0m、深さ 1.5 ～ 1.6m、96A 区で上幅 3.2 ～ 3.8m、深さ 1.4m を測り、断面形から薬研堀と評価される。その平面展開は、96A 区西端から東西方向に約 70m の直線部分があり、その東端から南へ 72°屈曲し 26m 延びたところで北東方向へ鋭角的（約 75°）に屈曲した後に約 26m 延びて再び東方向へ直角に折れる屈曲点に達する。このことから、屈曲点を設けることで「横矢掛かり」の機能を持たせたものと考えられる。堆積層は大形ブロック土が主体で、埋め戻しがなされたようである。遺物は下層で古瀬戸後Ⅲ期～大窯第 4 段階、登窯第 1 ～ 4 小期で 17 世紀後半までの遺物が含まれ、上層は大窯第 1 ～ 4 段階と登窯第 1 ～ 2 小期

である。近世になってもしばらく埋まらずに機能していたとみられる。

97BSD07と護摩札　97B区の南東隅で検出された南北方向に延びる溝で、長さ約10.0m、最大上幅約3.0m、下幅約1.4mを測り、断面形が逆台形の箱堀である。溝の位置から城館主郭の区画内をさらに小区分するものみられる。埋土の大半は97B区SD01の1～3層に相当し、最下層で護摩札が出土している。

護摩札は報告書において釈文が作成され、中央行に大書して「カーマン（梵字）奉修大峯柴燈護摩供武軍長久所」とあることから密教寺院からもたらされた護摩札とわかる。そして右行は「金剛蔵王　天正四年　尾州　智多　大御堂寺」、さらに左行に「胎蔵権現　八月二四日　野間　常楽坊」とあることから天正年4(1576)年に知多半島南西部の大御堂寺（野間大坊）から発給された護摩札であることがわかる。内容

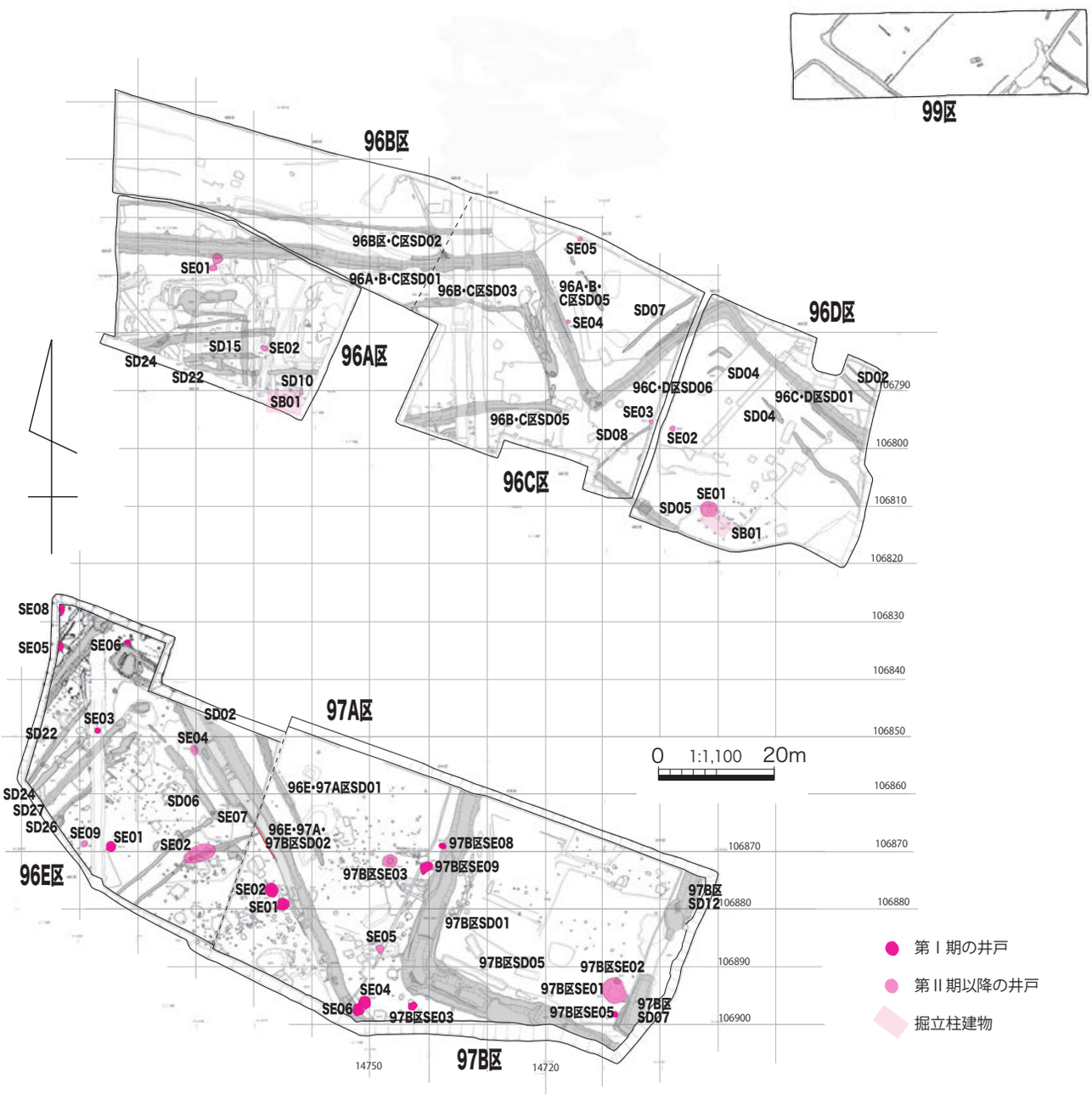

図2　大脇城遺跡の主要遺構配置図

が「武軍長久」祈祷であることから対象が城主なのは明白で、城内に掲げられていたものが年限がきたか廃城に伴って廃棄されたものと考えられる。城主と知多半島南部の密接な関係を示唆する遺物としてきわめて重要である。

97B 区 SD12　SD07 と同規模の溝でその北端から約 6.6m 離れた位置に南端がある。これらは一連のもので主郭内部を区画していたものと思われ、土橋状となった両者間が通路だったと考えられる。埋土も類似しており、斑土（ブロック）状の堆積が主体であることから埋め戻された可能性が高い。

96E 区 SE01　調査区南部の SD06・27 などで区画された屋敷地内に位置する井戸である。井戸遺構そのものに特筆すべき点はないが、最下部で常滑窯産の壺・片口鉢と尾張型第 11 型式の山茶碗と土師器皿が一括状態で出土している。15 世紀後半以降の井戸廃絶時に廃棄されたものと考えられ、先述のように遺跡全体を通じて常滑窯産陶器が一定量を占める点を踏まえると、この井戸を含む屋敷地の住人が物資の主な供給源を知多半島に有していたことが背景にあるだろう。

以上、主要遺構を概観してきた。先述のように報告書ではこれらを第Ⅰ～Ⅲ期に区分しているが、堀や溝の位置関係は各時期間で大きく変わることがない。それは後述するように 20 世紀の地割まで踏襲されている。しかし一方で井戸は第Ⅰ・Ⅱ期と第Ⅲ期でその分布が大きく異なり、前者の時期は南側調査区で集中し、第Ⅲ期は北側調査区で分布している(図 2)。ただし、先述したように 17 世紀末には高台へ集落が移転したとされるので、第Ⅲ期の井戸は溝と同じく耕作地に伴うものだった可能性が高い。したがって溝区画内に建物群が伴うのは概ね第Ⅰ・Ⅱ期とみることができる。

次に第Ⅰ・Ⅱ期間の変化を求めると、第Ⅱ期に 96E・97A 区を北西～南東方向に延びる溝 SD02・03 がある。さらに当該溝に直交する小溝（96E 区 SD06・07・27）によって屋敷地区画が形成されている。これら以外の堀や溝は第Ⅰ期のものを再掘削しており、城館段階のものに新たな地割を追加して集落域を形成したとみられる。井戸は遺物の時期からすると第Ⅰ期に含まれるものが大半となるが、その分布は SD02・03 に近接するものが多く（96E 区 SE04・06、97A 区 SE01・02、97B 区 SE03・04・06)、第Ⅱ期にも機能していたものが多かったと思われる。

3．掘立柱建物の想定と景観の変化

大脇城遺跡の発掘調査で確認された溝（堀）や井戸の展開に続いて、ここでは建物景観の復元を行う。報告書では、北側調査区で 2 基の掘立柱建物跡（96A 区 SB01・96D 区 SB01）が提示されているのみであるが、南側調査区ではピットの分布は確認できるものの掘立柱建物跡は想定されていない。そこで柱間 2 ～ 3 間が想定されるピット列を基に、それに直交するピット列があるものを掘立柱建物跡として抽出した。今回、ピットの土層および出土遺物を検討することができなかったのでそれぞれが同時期に存在したかどうかは不明であることから、ここで提示したものは平面形のみで見出したものに限られることを断っておく。以下に城館主郭（97B 区）を区画 A とし順に西へ区画 D までみていく (図 4)。

区画 A はピットの分布が希薄であるが、主郭の堀 97B 区 SD01 などに囲まれた空間で 5 基が想定できる。このうち中央やや西の 2 基は建て替えと評価できる。これに対して東半部でやや大型の 1 基と北東部で 1 間 ×3 間の細長い建物が想定されるが、堀の方位と異なるものも含まれる。

区画 B は、主郭西側で 97A 区 SD02 までの間には 3 基が想定できる。いずれも付近に井戸 2 基（97B 区 SE03・09）があり、これらで 1 つのセットになっていたと考えられる。

区画 C は、区画 B と 97A 区 SD02 を挟んだ南西側で、掘立柱建物跡 8 基が想定できる。全て側柱建物であり半数は桁行が 2 ～ 3 間の小規模であるが、井戸 97A 区 SE01・02 に重複・近接する 4 基は桁行が 10m を超える長舎となる。また平面規模だけでなく柱穴の長径も 0.6 ～ 1.0m と大きなものが含まれる。4 基はほぼ全てが重複関係にあるので 1 基ずつ 4 期の変遷が考えられるが、そのうち同規模のものが 2

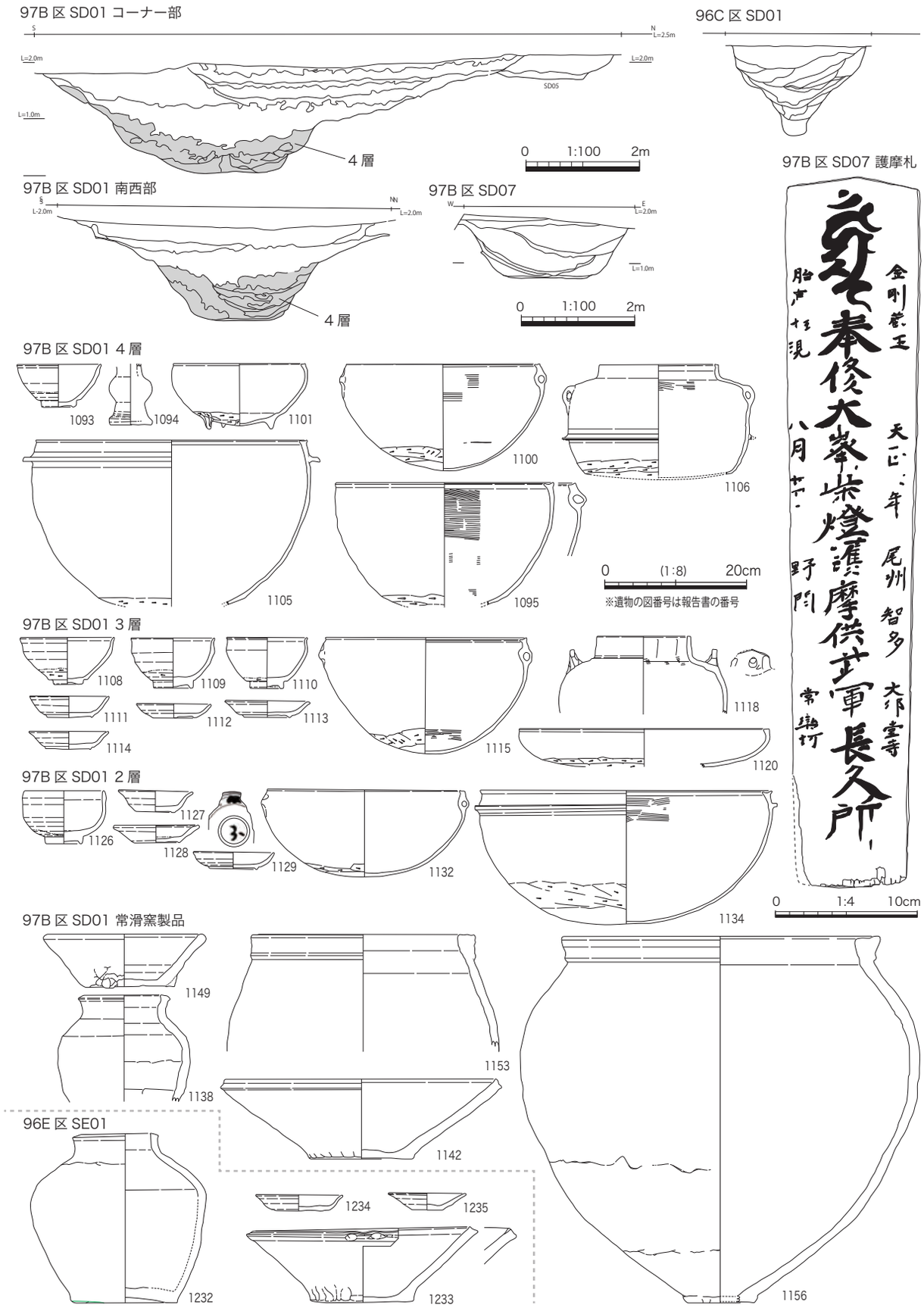

図３　大脇城遺跡の主要出土遺物実測図

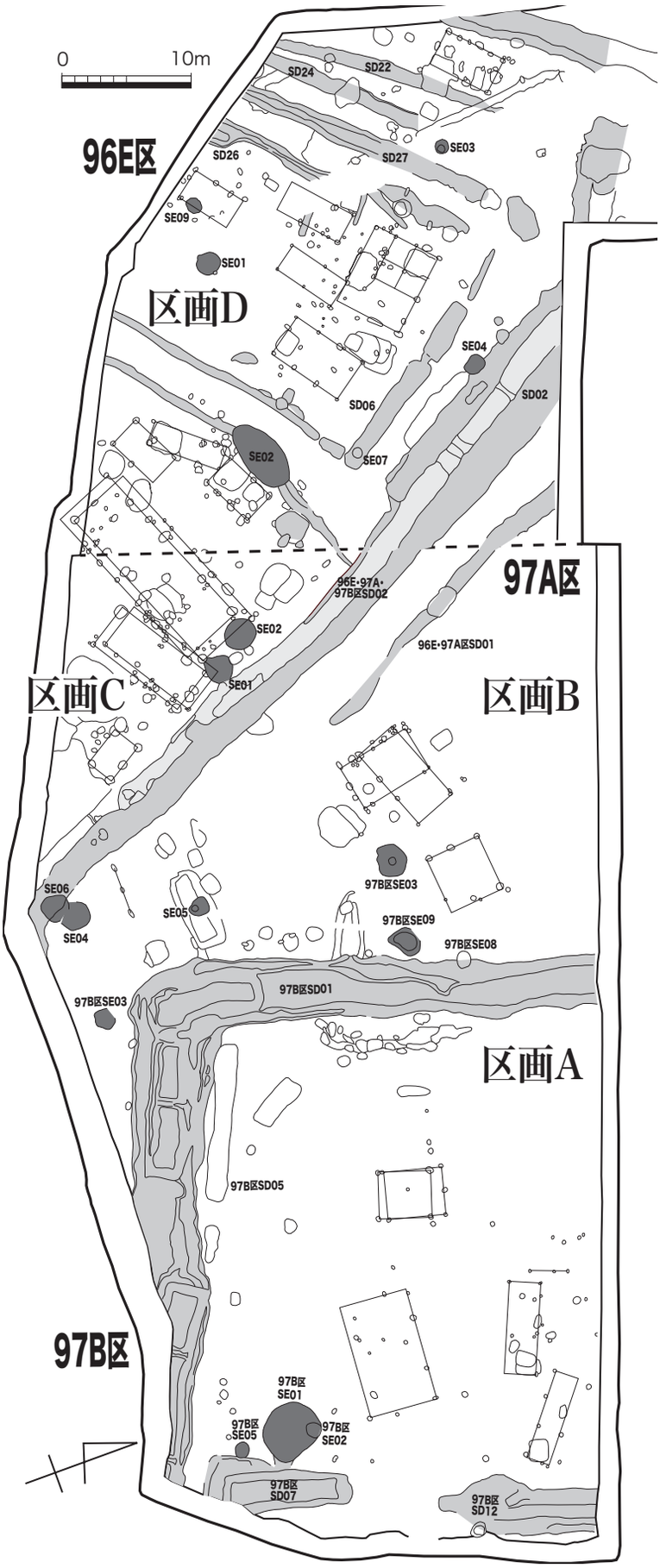

図４　掘立柱建物想定図

基ずつ存在する。建物の性格は総柱建物ではないため屋敷の主屋とみるのは難しく、大型の倉庫の可能性が考えられる。なお、井戸 97A 区 SE01・02 はともに第Ⅰ期に比定されているので、建物は第Ⅰ期後半～第Ⅱ期に機能していたと推測される。城館廃絶後であれば集落内で中核的な建物に位置づけられよう。

区画Ｄは区画Ｃとの間に２条の小溝を挟んだ西側に位置する。小溝は他の溝や堀に比べて規模が小さく、大区画内の通路側溝と思われる。一方区画西縁は 96E 区 SD27 が第Ⅱ期に相当するとされ、その東隣の溝 SD26 は出土遺物や重複関係から第Ⅰ期とされている。これ以外にも同方向・同規模の溝が平行してあるので第Ⅰ～Ⅱ期に拡張や変更があったものと推測される。そして溝群の西にはやや規模の大きな直線溝 96E 区 SD13 が第Ⅰ～Ⅱ期に存在するので区画Ｃ・Ｄはひとまとまりとして機能していた可能性が考えられる。このようにしてみると、区画Ｄで推定される掘立柱建物跡５基の中で総柱と側柱の組み合わせとなる建物が注目される。これは高床と土間からなる１棟の主屋であり、両区画の主が居住していた場所だったと推測される。

掘立柱建物の時期は先述のように遺物からの検証はできていないが、屋敷地区画溝の方位や区画内での位置関係からすれば大半が第Ⅱ期に相当すると考えられる。特に区画Ｃでは第Ⅱ期の小土坑が集中するとされており、関連がうかがえる。しかし区画溝の一部（96E 区 SD26）は第Ⅰ期に比定され（図５）、基本的にそれと同じ方位で溝が作り替えられていることや、区画溝群に重複する掘立柱建物が想定されないことを考慮すると、区画Ｃ・Ｄは第Ⅰ期か

ら機能しており、時期別の井戸の分布状況をみても特に区画Dが先行していた可能性が高い。このことから、出土遺物では大窯第4段階が希薄ではあるものの、土地利用については発展的に連続していたとみてよいだろう。

ただし、削平の度合いが強い区画A(主郭)は、97B区SD07・12の堆積状況からみて第Ⅰ～Ⅱ期に土塁などの取り壊しを伴う改変がなされたとみられる。したがって区画A内の掘立柱建物は区画溝に沿った方位で見出されてはいるが、防御性の強い第Ⅰ期とそれを弱める方向へ改変された第Ⅱ期のいずれに該当するのかは決めがたく、評価も変わってくる。これに関して、遺跡北部の薬研堀96A・B・C区SD01も上層を中心にブロック土による埋め戻しであることから、第Ⅰ期に防御線として構築され江戸時代に入っても維持され続けた堀群も17世紀後半には完全に無用として抹消されたとみられる。

4．旧地割からみた大脇城遺跡とその周辺

次に、発掘調査された城館主郭や屋敷地区画が、それらの廃絶後どのような地割に見出すことができるのか、さらにそれに基づいて周辺の地割から屋敷地区画などがどれだけ見出せるのか検討する。

大脇城遺跡とその周辺の旧地割については報告書にて20世紀前半の土地宝典によって示されており、それを概観する。まず①大脇城遺跡の調査地点では、南北方向に2つの方形地割がみられる。次に②遺跡北側の字丸根の北西隅が曹源寺旧地とされ、一方③遺跡南側の字元屋敷には比較的小さい長方形の地割が密集している。そして④元屋敷の東側に接して正戸川が屈曲し入り江状に右岸が凹んでいる。

これら特徴的な旧地割に発掘調査区と遺構を重ねてみる。①は南側の方形地割が区画Aに相当し、97B区SD01の西堀部分を延長した先に屈曲箇所のある溝状の地割がある。おそらくこれが区画Aの北堀であり、それに基けば西堀の長さは約60mとなるだろう。それに対して区画A内をさらに区切る溝と評価される97B区SD07・12が方形地割の東辺に相当する。このことから区画A（城館主郭）はほぼ正方形で、そのまま正戸川に面していた可能性もある。一方北側の方形地割は薬研堀に対応するが、薬研堀が西方へ連続しているので堀で閉じられた区画の反映ではなさそうである。また、区画A西側や字丸根にかけては大きめの区画を思わせる地割が連続しており、区画B～Dに相当するものが主郭から曹源寺まで連なる景観が想定されよう。②は調査区に重複していないが、寺伝にある字元屋敷にはあたらない点が気にかかる。例えば城館の所在地など別の伝承

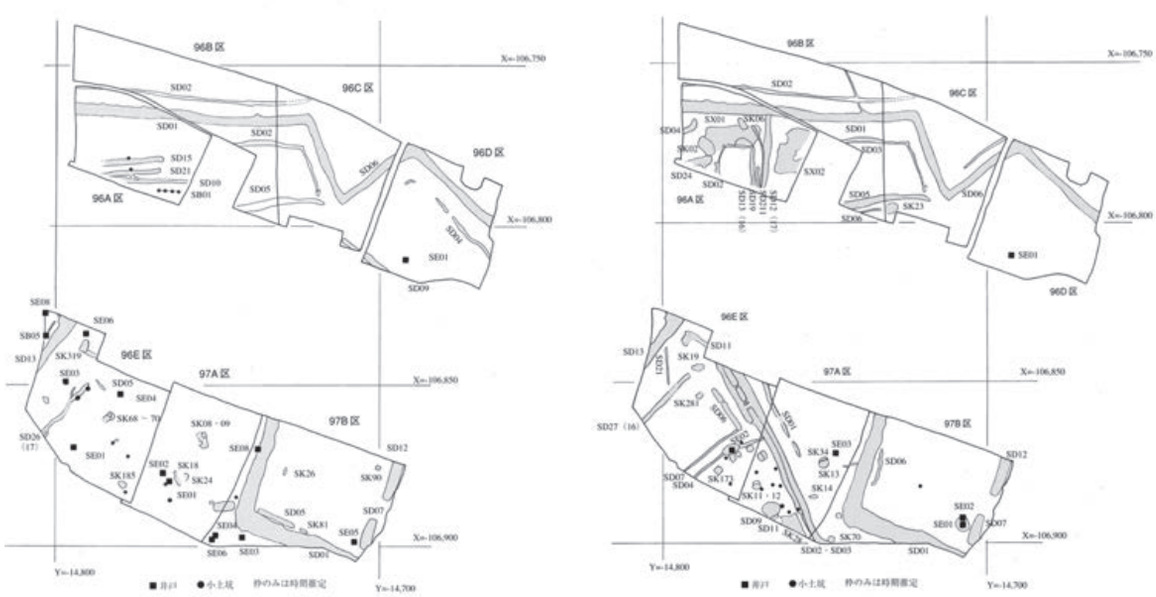

図5　大脇城遺跡の変遷（第Ⅰ期・第Ⅱ期、北村1999より）

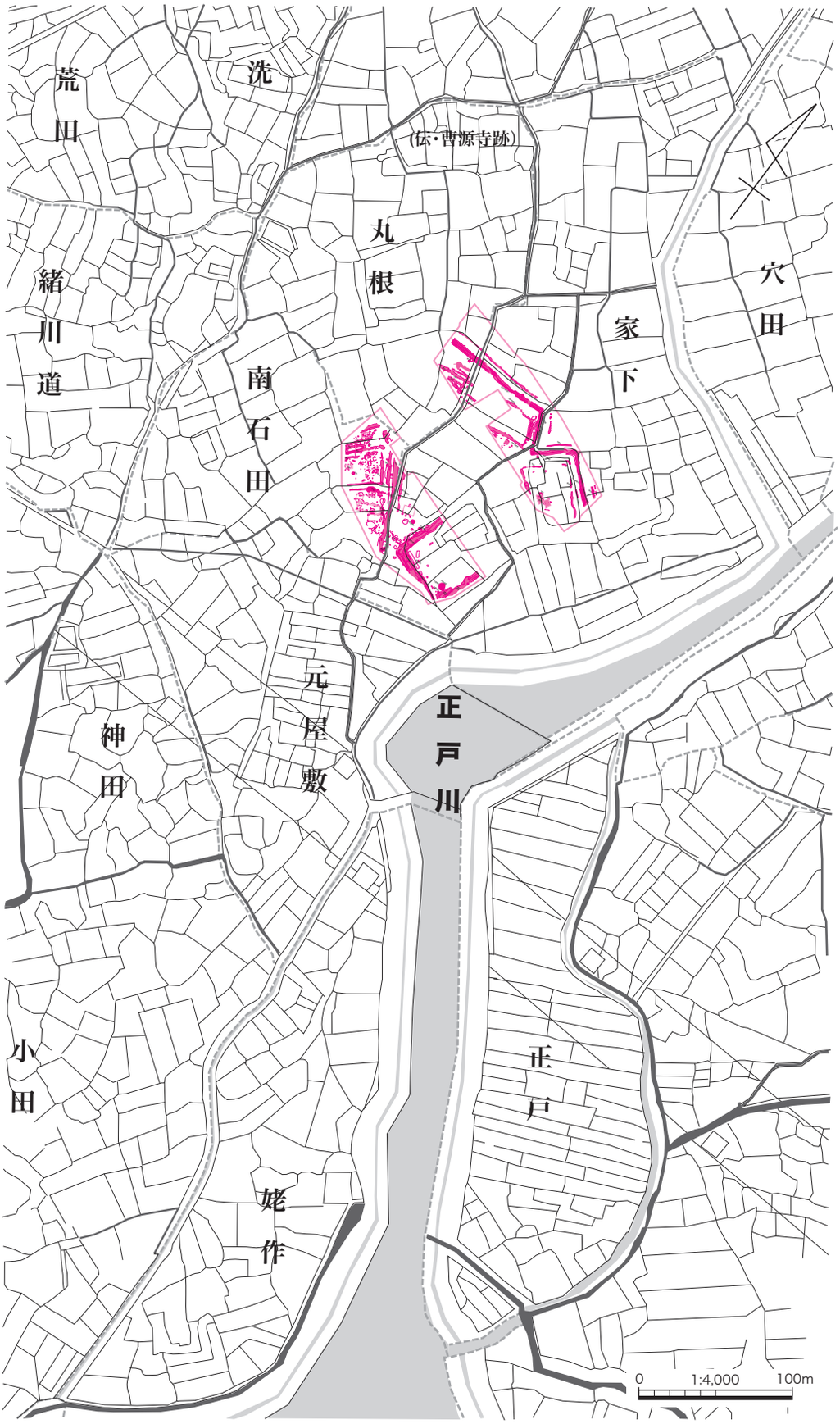

図6　大脇城遺跡の遺構と旧地割の対応関係（北村 1999 の土地宝典をもとに作成）

と交雑している可能性もあるだろう。③はその東側に里道（赤道）が一部で屈曲しながら北西～南東方向に延びているが、その道は97A区SD02・03に重複している。これは区画Bと区画C・Dを分かつ位置である。先述のように、溝は第Ⅱ期には存在しその一部は第Ⅰ期に構築されたと考えられるから、それ以来継続する地割である。④発掘調査区（97B区）南側にある里道の交差点まではその両側に小区画が見出せるが、交差点から南側では里道の西側に小区画が集中する。おそらく道を挟んだ東側は正戸川の旧河道にかかっており、より深く入り江状に入り込んで船溜まりなど川湊になっていたと考えられる。その後、江戸時代の氾濫で河道範囲が拡大したとみられるが、川湊とそれに付随する町屋の景観が17世紀代にかけて展開していたと想像される。

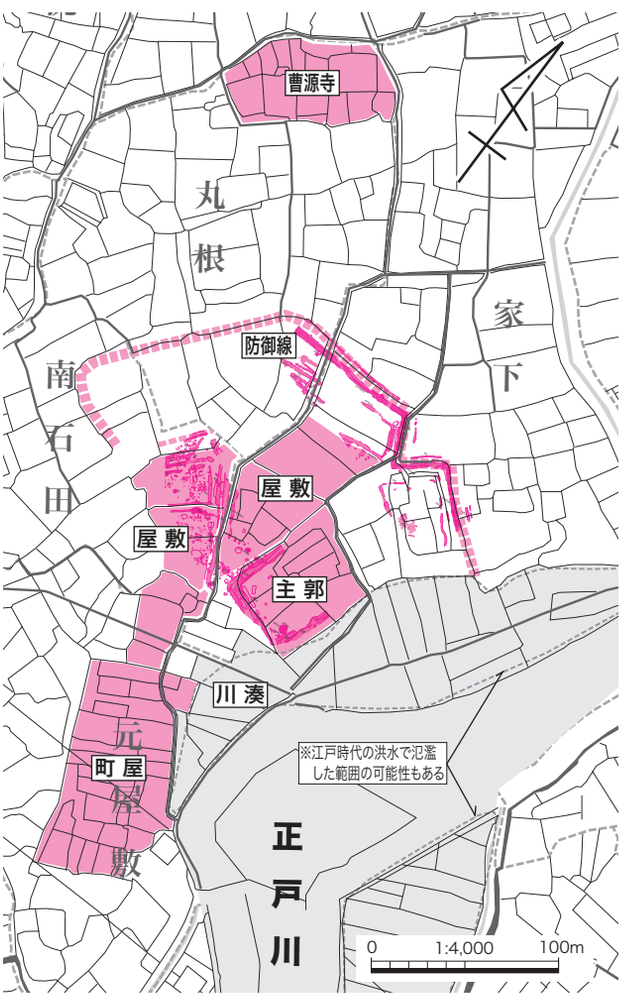

図7　城館と周辺の景観復元

5．梶川五左衛門について

先述のように、江戸時代の地元（大脇村）では大脇城遺跡に含まれる城館跡（古城）を梶川五左衛門の屋敷と呼ぶことがなされており、城主についてよく知られた存在であった。そこでまず梶川五左衛門の人物像について確認する。

梶川五左衛門は生年不詳であるが、父親は梶川平九郎（宗玄）という土豪である。平九郎の子として長男の平左衛門尉高秀、次男の七郎右衛門一秀があり、五左衛門秀盛は三男とされる。高秀が尾張国丹羽郡楽田城の出身であることから（『寛永諸家図伝』）、梶川氏はもとは丹羽郡にあったと考えられる。なお、五左衛門については文勝という名も知られているが、天正11（1583）年に知多郡横根村の延命寺（現・大府市）に対して寺領寄進を行った際の文書（延命寺所蔵文書）に「梶川五左衛門尉　秀盛（花押）」とあるので「秀盛」が実名である。

『信長公記』（池田本）によれば、天正8（1580）年に高秀の子である弥三郎高盛とともに織田信長に召し出されて仕えるようになったとされる。逆にそれ以前の動向はほとんど不明ということになるが、兄の高秀については、永禄3（1560）年の桶狭間の戦いにおいて中島砦守将の一人として『信長公記』に記されている。その高秀は永禄11（1568）年の摂津池田城攻めで戦死したが（『信長公記』）、その記事に「水野金吾内」の「梶川平左衛門」が奮戦して討死とある。「金吾」は水野忠政とみられ（服部2021）その家臣であることから、高秀の代には刈谷や知多半島に活躍の場が移っており、秀盛もそれに同行していたと思われる。

さて秀盛は、先述のように『寛文村々覚書』において大脇村の「古城跡」に居城し、次いで横根村の「古城跡　南北五十四間　東西参拾八間　先年梶川五左衛門取立、半造作之時分、同郡成岩村へ引越之由、今ハ畑ニ成。」と記されているように、横根城を築城するもその造営中に成岩城へ移っている。成岩城は橋本了圓によって天文年間に築城され、天文12（1543）年以降、水野信元によって攻略されたとされる。秀盛は織田信長亡き後は信雄に仕え、天正13

(1585) 年の『信雄家臣分限帳』では 1480 貫文の地を知行し成岩城主であることが記されている。それまでに居城を移し比較的高い扱いを受けていたようである。そして豊臣秀吉政権下では文禄年間の朝鮮出兵に加わり病没または討死したとされる。享年 60 歳であったといい、そこから推定すると秀盛の生年は天文元 (1532) 年頃となるだろう。

以上の経歴から梶川五左衛門秀盛が大脇城遺跡の城主だったのは 1585 年以前であり、さらに 1580 年までは水野家の家臣としての城主だったことになる。

6．丹羽隼人佐について

それでは梶川五左衛門秀盛はいつから「大脇城」の城主であったのか。ここにもう一人、大脇村の支配に関わった人物がいる。

天文 9 (1550) 年 12 月に今川義元より発給された判物は（個人蔵、豊明市史編集委員会 2002)、同年 6 月以来福谷城（現・みよし市）の守備に功績があった丹羽隼人佐に対し、その旧来の地である沓掛･高大根（以上現･豊明市)･部田村（現・東郷町）を安堵するという内容である。そして「今度一変之上者」とあるので、作戦が守備よく進み情勢が今川方に有利になれば、丹羽隼人佐が以前に近藤右京亮に売り渡した領地についても元に戻そうといい、合わせて数年前より知行している横根・大脇についても引き続き治めるよう指示をしている。

丹羽隼人佐についてはこれ以上不明であるが、福谷城に近い岩崎城が丹羽氏の居城であることから、尾張東部地域の土豪の一員とみられる。ここで重要なのは、隼人佐が 1540 年代後葉以来横根村と大脇村を支配下としている点である。となれば当該期の「大脇城」城主であった可能性が高い。報告書では、隼人佐と梶川氏との関係が判然としないことからこれ以上の言及はしていないが、梶川五左衛門秀盛の年齢はこの時点で 20 歳以下であったと思われるから、丹羽氏の支配下となる以前に梶川氏が「大脇城」城主であったと仮定しても父や兄の代であると思われる。さらに、彼らが尾張国丹羽郡（楽田城）の出身であることも考慮すると、16 世紀半ば以前のおそらく築城者でもあろう「大脇城」城主は不明とするしかない。

ともあれ、1550 年代の境川流域では今川義元の勢力が拡大しつつあり、その情勢が 1560 年の桶狭間の戦いまで続いていたとみるべきである。例えば桶狭間の戦いの前日に今川義元が滞在した沓掛城は、当該期に土塁を拡大するなど防御性の強化を行っており、それに伴い埋め立てられた園池からは「天文十七」と墨書された木札が出土している（加藤 2001)。「天文十七」は 1548 年のことで丹羽隼人佐の活動時期に重なる点も興味深いが、このような改造が可能だったのは、彼が元々拠点にしていた地域の城という点も関係しているのだろう。これに対して横根村・大脇村など境川流域南端が勢力下に組み入れられたのが比較的後だった点は注

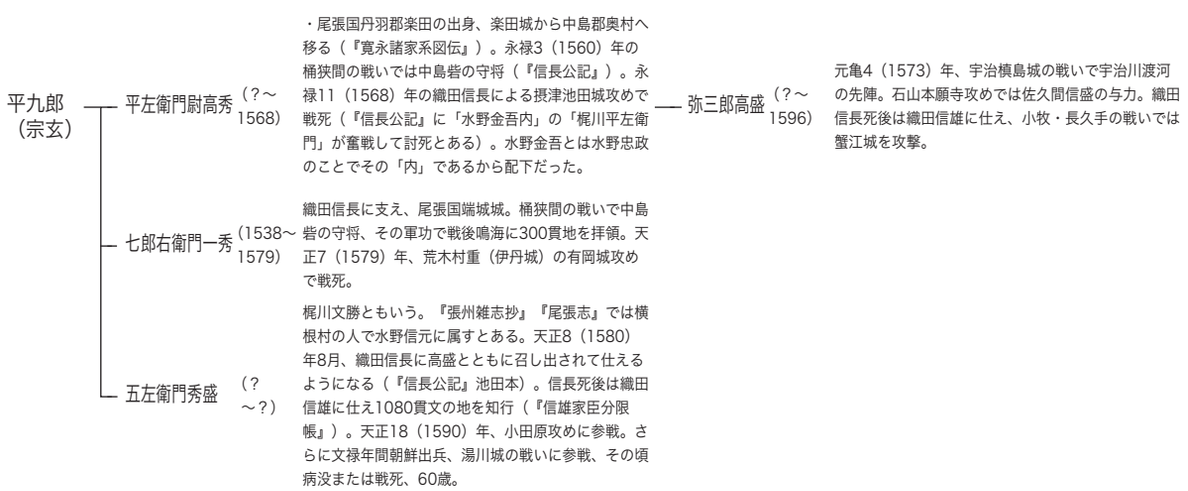

図 8　梶川五左衛門とその一族

意すべきで、「大脇城」が当該期に大きな改変を受けた形跡がないことも勢力範囲の周縁であったことが背景にあると思われる。

7．桶狭間の戦い以降の「大脇城」と水野家

この勢力範囲が大きく塗り替えられたのが桶狭間の戦いである。これにより尾張地域の今川方が駆逐され、沓掛城には織田家家臣の簗田政綱が入った。今川義元に所領安堵された丹羽隼人佐の消息は不明で、その旧地には新たな領主が配されたであろう。「大脇城」もその１つで、先に考察したとおり、この時に梶川五左衛門秀盛が城主になったと考えられる。

桶狭間の戦いは、尾張の織田方と駿河の今川方の戦争として把握されるのが一般的であるが、知多半島の付け根にあたる「大脇城」や梶川五左衛門秀盛に視点をおくと緒川水野家の動向が大きく関わってくる。天文 12（1543）年に水野忠政が亡くなり長男の信元が跡を継ぐと、彼は知多半島東部への攻略を進めていった。それは先に見たように、天正年間までに梶川五左衛門秀盛が居城を移していった過程をみれば、衣浦湾岸を南に進攻するものであったことがわかる。

当該期の知多半島は、緒川水野家とは別にいくつかの水野家が分立しさらには大野（現・常滑市）には佐治氏がいた。これらの勢力範囲は半島の沿岸部を拠点としていることが中世城館跡の分布からも明らかである（図 9）。また丘陵地により相互に分断された地形であるから、ここに進出し統一を進めるには水上交通（軍事力）を背景にした争いであったと考えられる。例えば、桶狭間の戦いでは、荷之上（現・弥富市）の服部左京亮が「武者舟千艘」（『信長公記』）で今川方を支援したとされ（小川 2020）、また『信長公記』天理本には同戦にて「大野小河衆」（大野＝佐治氏、小河＝水野氏）の活動が知られ、両者は半島の西岸と東岸であるからともに動くとしたら海上であるため海戦も想定されている（服部 2021）。

このような水野信元の軍事行動に家臣として従った梶川氏が水上交通に通じていた可能性はきわめて高い。それは、大脇城遺跡が正戸川に面して川湊の機能も有していた点からもいえる。川湊の機能は、その想定地に隣接する屋敷地区画の主要活動期が第Ⅰ期から第Ⅱ期に継続していることからも、第Ⅰ期後半にあたる桶狭間の戦い以降に入城した梶川五左衛門秀盛の活動によって発展したとみることができる。とすれば梶川五左衛門屋敷となった 1560 年以降の「大脇城」は、水上交通を駆使しながら水野家を支える拠点になったと考えられる。

その後は、知多半島西岸の大御堂寺から護摩

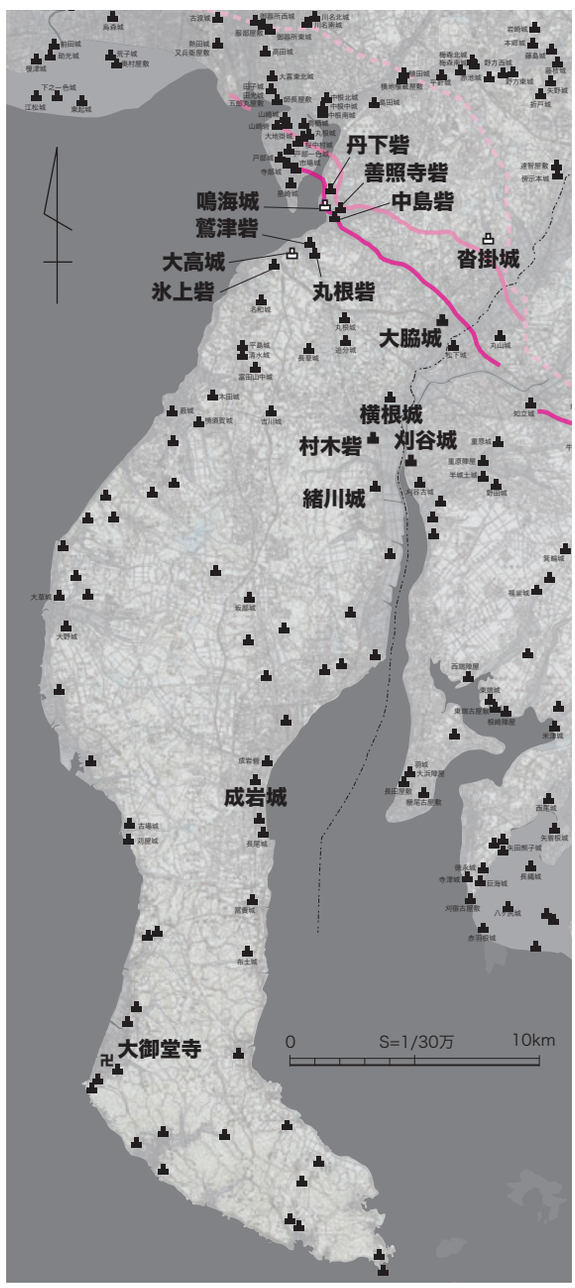

図９　知多半島の中世城館跡分布図

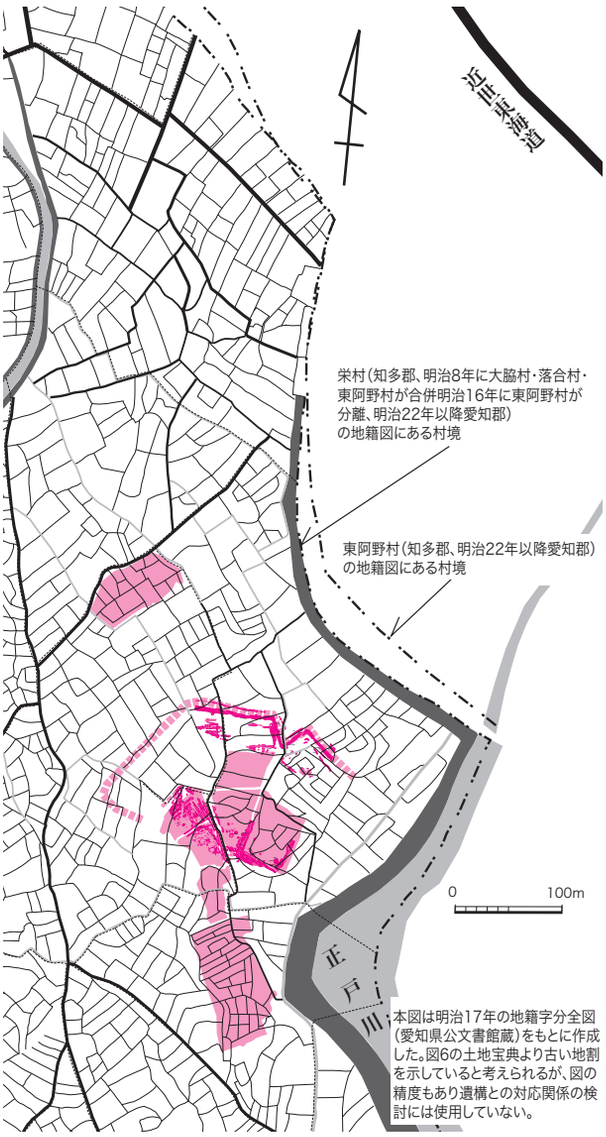

図 10 「大脇城」と近世東海道の位置関係

札の発給を受けるなど、梶川五左衛門屋敷と水上交通を介した知多半島の関係はより強くなっていったと考えられる。ところが天正 3(1575) 年 12 月、秀盛が仕えていた水野信元が岡崎で誅滅され、天正 4 年、水野領は織田家家臣の佐久間信盛の下に移る。護摩札はまさにそのような情勢転換のさなかにもたらされたものであることにも注意しておきたい。

このように大脇城遺跡を評価すると、その北部で検出された薬研堀 96A・B・C 区 SD01 の防御線としての機能についても考察が可能となる。この防御線には 2 つの目的が考えられ、すなわち①正戸川と川湊を背後にした城館と屋敷地を囲む防御と、②大脇城遺跡の北東約 1km をのびる近世の東海道に対する防御、である。①については、地籍図との対照により薬研堀が遺跡西側に延びている可能性が指摘できる。②についても 2 つの村（栄村と東阿野村）の地籍図を連続させることで、検出された横矢掛かりが東海道に向いていることが確認できる。近世東海道のルートが知立から沓掛を経由する中世の鎌倉街道に代わって機能し始めるのは 16 世紀後葉とみられるが、桶狭間の戦い以降にこのルートを進軍してくるのは尾張の織田と今川に代わった松平のいずれかであろう。水野家はそのいずれとも対峙する可能性があったので、この防御線は勢力範囲の北縁としてひじょうに重要だったと考えられる。当該遺構の発掘調査では詳細な構築時期は見出せていないが、梶川五左衛門屋敷の防御線として新たに構築された可能性も考えておく必要があるだろう。

参考文献

池本正明　2001 『大脇城遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 97 集

小川雄　2020 『水運と海賊の戦国史』平凡社

加藤安信　2001 「第 1 章第 4 節 中世城館遺跡、塚」『豊明市史 資料編補一 原始・古代・中世』豊明市

北村和宏　1999 『大脇城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集

鈴木正貴　2017 「第 1 章第 3 節 時期区分と編年」『愛知県史 資料編 5 考古 5 鎌倉〜江戸』愛知県

豊明市史編集委員会　2002 『豊明市史 資料編補二　桶狭間の戦い』豊明市

豊明町誌編集委員会　1958 『豊明町誌』

服部英雄　2021 「桶狭間合戦考」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第 2 号